

レブン寺の学僧ゲドン・チュペについて

矢 田 修 真

Dgehdun-choshpela は一八九五年、Amdo 地方の Rebkon で、父 Sagshehan-Dor Je-mu Padma の息子として生れている。

ゲドン・チュペは、自分の父親を十五歳で亡くし、父方の伯父と財産問題で折合いが悪くなり、世俗の問題には興味を示さなくなっていた。自分の本当の職業として、僧侶を選び、仏教学を勉強するために、Rebkon に入門した。そこでは、因明・唯識・阿毘達磨と云う、仏教学の基礎を学んだ。

その寺の中でも、一際輝いた存在だったようである。次にゲドン・チュペは、Dhi-Tsha に行き、そこで絵と詩の勉強を始めている。二十五歳の時に、ラサで、更に仏教学の奥義を極めるために、レブン寺に入っている。そこでも秀才ぶりを認められ、まもなく学位を得ている。その後、インドに遊学することになり、インドでは、最初、有名な白系ロシヤ人で、印度学者であり、チベット学者であった、Roerich 博士のもとに滞在し、そこでサンスクリット語―パリー語―英語を一生懸命勉強した。

ゲドン・チュペは生涯、このローリック博士を敬慕していた。

パリー語学習の成果として、Chos kyi tsigs bhegpa を刊行している。Dhamma-pada は、チベット大蔵経の中に、Udanavavarga からの訳は、存在するけれども、パリー語からの訳は、ゲドン・チュペが最初である。

ゲドン・チュペの訳は、文法を重視して、原典に忠実であり、当時の仏教世界から、偉大な評価をもって、受け入れられた。

サンスクリット語学習の成果として、Dpalunaga pohiglu (Bhagavadgita) の一部分翻訳と、hdoda pali bsten beos (kāma-sūtra) の翻訳を行なっている。その頃、ゲドン・チュペの語学の才能と学識に注目していた、インドのパンディータであり、チベット学者であった、Kahula-Samkhyayana の招待を受けていた。サーンクリトヤーナは、当時ゲドン・チュペから、チベットにおける、寺院の古写本の状態を聞きだ

していたが、ゲドン・チュペの方でも、サーンクリトヤーヤナの学識に畏敬の念を持っていた。

翌年の一九三四年五月に、サーンクリトヤーヤナは、Sigatse の Salu 寺で、大乘阿毘達磨集論の梵本写本を発見している。

ゲドン・チュペは、チベットの歴史を考察するにあたって、Csoma de Kőrös や A. H. Francke のヨーロッパの先学者達の業績を高く評価しつつ、史料批判や実証主義的歴史観の立場で、それらを批判し、Debther Dkarmo や Debther Shonpo の歴史書を翻訳し、新たな史料や、主観的な意見を交えて、発表している。

更にゲドン・チュペは、現在使われている、チベット語が、話し言葉と、書き言葉が、あまりにも、かけ離れているのを憂慮し、チベットで、最初に新聞社を経営した Tarchen と協力して、チベット語の辞典を刊行している。その他にも、多くの著作を残しているが、ここでは、割愛する。以下は、ゲドン・チュペの弟子 (Bkruś Mñon-thupstan chos dar) が一九八〇年、ゲドン・チュペの語録を集めた著書 Dgeśid-nuachos bphela gyi lorgyus (ゲドン・チュペの物語) を出版しているのので、それによって、ゲドン・チュペの思想の一端をうかがって見る。この本の二十七頁に、次のようなことが、記されている。

レブン寺の学僧ゲドン・チュペについて (矢田)

「レコン寺にいた時、Mthu Rgyha (呪殺) の色々な方法を学んだけれども、彼らの呪殺は、ある段階に来てから、密数とは、かけはなれた、独自に走っているように見え、又守護神たちが、御寺を自由に走り廻るようなことがあった時に、祭主が赤い牛の角に血を塗り、御寺の周辺をぐるぐる廻り、敵の居る方向に血を注ぎ、後に、大麦で作った人形を作り、それと同じ方向に捨てたりした時、相手側が心の中に潜在的に打撃を受け、先生 (ゲドン・チュペ) は、呪殺とは、相手が信じこむところから効力を発揮し、經典そのものとは、かけはなれたものであると、おっしゃりました」。

ゲドン・チュペは、呪殺を仏数の退化現象とみなしていた。次に、チベット文化の領域について、本の二百三十二頁以下に、次のように記述している。「獅子と蓮の花、アダムバラ、サツクシヤ (灌頂を受け時に使う草) 等についても、説明をなされた。それらは、チベットの日常生活の中に浸透しているが、本当のものを理解していない。ライオンについては、今日チベット人が、印度ライオンと呼んでいるものが本当であって、私達が絵などに描いているライオンは、存在しない。中国人がライオンを見たことがなく、彼らの小犬をライオンと思い、獅子と呼び、その絵がチベットで、疑いもなく、獅子として受け入れられた。チベットに入った由来については、タンカの裏地 (絹で作ってある) に描かれて入って来

たのが、最初であるとされている。その証拠に、本当のライオンの絵が、ジョカン寺の柱の上に描かれている。しかし、今日本物の獅子は、位を下げ、軽蔑され、中国の唐獅子を雪の獅子と云って、崇めている。今日、チベットの国旗にこの唐獅子が描かれているのに対し、私は、びっくりするほどに、縁起悪を感じている。しかし、私がこんなことを言ったことは、誰にも言うなど、おっしゃった。

本来は、それらの唐獅子の変りに、逞しいヤクを描くべきで、ヤクはチベットにしかない。ヤクがいる処は、本来のチベットの文化的領域内である。かわいそうに、チベットの人々は、決して山羊や羊等、家畜に対し、愛情を持ってないわけではないが、特にヤクに対しては、肉を食い、血を飲み、又数ヶ月もの長い旅に、荷を背負わせ、目的地に付いた時には、恩を忘れ、殺して食べてしまうのだ。もしもこのヤクを、国旗につけるのであれば、それなりに、並べかたを考へなければならぬ。とおっしゃって、先生は感情をこめて、説得しました。その為には、今となって御迷惑にもならないと思つて、ここに、そのエピソードを書きおろしました。又その上、これは我々の祖国の誇りとして、認識できるような気がします。以上は、テンドン・トウブテン・チュダルの「ゲドン・チュベの物語」の部分訳であるが、これを見ても、ゲドン・チュベが少年の頃、世俗の問題に興味を示さ

なかった人間が、時とともに、世俗の問題に、大いに関心を寄せたことが、よくわかる。

それは、インドにおいて、英字新聞や、社会思想の書物を研究した結果である。

チベットの貴族専政封建主義社会において、貧しすぎるチベット民衆のあきらめきつたようなあり方に、非常に矛盾を感じていたが、黙することなく、チベット社会の現実の矛盾を説いた為、ラサの貴族たちの怒りをまねいた。貴族たちはゲドン・チュベに、中国と通謀していると嫌疑をかけ、一つ一つゲドン・チュベの言動の調書を作り、裁判にかけた。中国と通謀しているとゆう嫌疑は、根も葉もない疑いだが、これは、ゲドン・チュベが晩年、中国語を勉強していた為である。刑務所に入ったが、一年ばかりたった後、釈放されている。しかし刑務所時代の後遺症の為、一九五一年五十六歳の若さで亡くなっている。ゲドン・チュベの一生をかけた業績は、次の四つである。チベット人に外国語の学習を勧めたこと。ゲールック派は現在あまりにも保守的・権威主義的になつてしまっている、それへの批判。僧院での独身生活は、結局同性愛の悪弊を残し、それならば僧侶も、結婚したほうがよいと説いた。チベット語が会話と文章が、かけ離れている為、言文一致運動をしたこと等である。